

PRIME 連続講座「東日本大震災と私たち」

第1回（4月14日）記録

文責 猪瀬 浩平

連続講座第一回 Café du Prime 特別篇には30名あまりの人が集まった。明学の学生（ガイダンスに来た新入生から4年生まで）、卒業生、教員、名誉所員、それから学外の市民まで、多様な顔ぶれが集まった。

竹尾所長の開会あいさつの後、国際学部生の両角千尋さんから、3月11日地震当日の自身の経験について報告された。地震発生時、彼女は就職試験を受けていた。余震が続くなかでも、予定どおり就職試験は続き、受験生はみな家族の安否を気にかけてながら終了時間までを過ごしたと言う¹。この話には、地震によって現代社会のコントロールが壊されながら、その残存した部分が暴力的に機能し、生命の安全を軽視する対応をしてしまったことが伺えるだろう。

その後、3グループに分かれてディスカッションを行った。3月11日の地震とその後の混乱を如何に過ごしたのか、その後に起きた原発事故や停電、大学の授業延期などの事態の中で、何を考えているのか、それぞれの経験を共有し、共通するテーマについて議論を行った。

以下、その概要である。

グループ・ディスカッションでは、共通の関心として大きく分けて以下のポイントが出された。

① 地震後の不安の高まり

大災害という非日常的な出来事の直後には、参加者の周囲でも人々の不安や恐怖といった感情が高まっており、それが行動として表れていたという発言が多く出された。ここまで大きなものであるということを把握できた人はほとんどいなかった。ある人は、確定申告をしていて地震後にも作業を続け、出してから帰宅をした人がいたり発表会やシンポジウムの準備をしていた人達は、地震後も続けていたり、時間が経つにつれて事態の深刻さをインターネット、ツイッター、TVなどから情報を得た事で把握した人が多かった。

「電車が止まってしまったとき、JRの駅員に怒鳴っている人がいて驚いた。」（国際学部4年）

「バスの乗客がパニックになって、運転手さんが声をあげてやっと収まった。」（所員）

「スーパーの買い占めがひどかった（そしてテレビで騒がれて収まった。）」（国際学部4年）

「電車の中で地震にあった。停車している中、周囲と話すことで気を落ち着かせている人がとても多いように感じた。」(卒業生)

「電車の中で地震にあった。停車している中、周囲と話すことで気を落ち着かせている人がとても多いように感じた。」(卒業生)

「高校の卒業式の最中だった。…バスなどは混雑していた。…コンビニの店員の人などは、自分も帰りたい中でやっていてくれて申し訳ないという気持ちになった。」(社会学部1年生)

《議論のポイント》

これらは、どれも冷静な判断ができない状態時に、人々が「上の者（公的な存在）」に不安な感情をぶついたり、どうすればよいのかという指示を求めたりするという傾向があるということが表れている。このような傾向が良いのか悪いのかはさておき、こういった状況の中で、テレビCMなどが大々的に「頑張ろう、日本」などのメッセージを送り続けた時、人々はとても簡単に「公共のメッセージ」になびいてしまうのではないか、という問題がある。

② 「自粛をどう考えるか」という事について

《議論のポイント》

なぜ自粛をするのかという問題は、経済的な理由あるいは倫理的な理由から賛成反対が分かれる。この意味で、それぞれの立場から自粛すべきか／しないべきか、という議論はあり得ることを確認した。

③ 原発と、情報管理について

やはり原子力発電所の事故について危機感を抱いている方が大勢いました。元々核問題に関心があったという学生の方は今回の事故で意識が変わり、自分に必要なのは勉強だと発言した。また、学生運動を経験している方からは「技術は中立ではない」「外交政策とし原発がつかわれていないか」と原発の背後にある社会性に言及していた

「母に会いに福島まで行く途中、測定器で放射能の値を測りながら向かったところ、大抵報道より高い数値がでた。…報道はされないが、福島の方は自分たちの県が無くなるのではないかという恐怖さえ感じている。」(所員)

「原発によって生活が危険にさらされているということを再認識した。」(一般参加者)

「建前では、日本では“表現の自由”“報道の自由”が保障されているとみんな思っているが、事実は違っている。NHKの解説員はJOCの臨界事故では原子力の平和利用推進の発言を

していたが、福島原発事故に関して東電・政府に怒りをあらわにする一面があった。その後一週間ほど出てこなくなり、最近またぼつぼつと出てくるようになった。日本の報道の流れとして、このまま原発の報道は停滞していくだろう。こんな状況で私たちが“自由”と感じているのが問題だ。正確な情報がほしいなら、私たちが示さなくてはならない。がんばっている人、メディアを市民が応援しないといけない。」(客員所員)

「原発を作り維持するためにはとても多くの企業と人が関わっている。そのつながりは国境関係なく、ノウハウ、技術で結ばれている。もちろんサルコジが来日したり「もっとしっかりやれ」というのはあるかもしれないが、国家間のやりとりより企業間のプレッシャーだと思う。海外のメディアがたくさん入っているが、本来日本のメディアの情報をもっとも最新でなければおかしい。しかしそうではない現実がある。しかも海外のメディアに対して、政治家は取材拒否、会見に入れない・日本語のみであった。少しずつ改善されてはいるが、国際的に恥ずかしいと思う。また震災後日本に帰国し一驚いたのは、ナショナリズムの盛り上がり。所員：原発を作り維持するためにはとても多くの企業と人が関わっている。そのつながりは国境関係なく、ノウハウ、技術で結ばれている。もちろんサルコジが来日したり「もっとしっかりやれ」というのはあるかもしれないが、国家間のやりとりより企業間のプレッシャーだと思う。海外のメディアがたくさん入っているが、本来日本のメディアの情報をもっとも最新でなければおかしい。しかしそうではない現実がある。しかも当初、海外のメディアに対して、政治家は取材拒否、会見に入れない・日本語のみであった。」(所員)

《議論のポイント》

原発と、放射能による恐怖、危険性が多くの人に認識されるようになった一方で、大手の報道では測定値を低くしたり、基準を引き上げたりと、事を小さく見せる働きかけがあるという意見が多く出た。そして一方では、①で触れたように日本復興というムードを盛り上げていくという動きが同時に行われているという事がある。

記録の作成にあたり、国際学卒業生武井一真さん、国際学部4年両角千尋さん、社会学部4年青島右京さんに記録作成に協力してもらいました。

¹地震のとき、ちょうど就職活動の最中でした。入社試験を受けていたのですが、揺れが起きても監督者は「大丈夫だろう」と言いました。その後、余震が何度かありました。監督の社員がいなくなって、地下の試験会場に受験者だけが取り残されてしまう時間帯もありました。それでもテストは続きました。

そのうちに受験していた人の中で、「危険だから試験は中止したほうがいいのでは」と手をあげて提案した人がいました。それでも、監督者は「遠くからきている人もいるので、交通費

が無駄になってしまう。中止できない」と返事をしました。それでも彼女が食い下がったら、「それでは受験者の多数決で、中止するのかどうかを決めてくれ」といいました。結局、「中止・延期」に賛成したのは彼女ひとりで、私も含めて他の人は手を挙げませんでした。そして結局その人も棄権せず、テストを受けることになりました。

そのうちに、女性社員がバタバタと降りてきて、テスト会場横の更衣室で着替え始めました。監督者が「どうしたの」と問いかけると、「すぐに家に帰る準備をします」という言葉が試験会場まで聞こえてきました。こちら余震や家族のことなど気が気ではないのに、試験は続きました。試験は、予定時間どおりに終わりました。

会場は人形町でした。地上に出て、歩いて、5時くらいに秋葉原駅につきました。しかし、電車が動かず、改札の前には300人ほどの人が並んでいました。この日は風が冷たく、どこか暖を取れるカフェやレストランを探しましたが、どこも満員で店の中にすら入れません。マクドナルド、スターバックスは臨時閉店していて、その前にも人が並んでいるような状況でした。この時間になると、居酒屋は営業を始めていました。あいているところから、路上にいた人たちが入りはじめ、しだいに大行列になりました。私はたまたま空いていた地下の飲み屋に、一緒に受験した2人と入りました。店内は同じように電車が動くのを待っている会社員の方でいっぱいでした。次第に、JRがその日終日動かないということがわかりました。私の自宅は神奈川の海老名の方なので、歩いて帰れる距離ではありません。この日はもう帰れないとわかり、どこかに泊まる場所がないかと考えました。この時点で8時になっていました。

Twitterでのつぶやきを通じて、友人から情報が入り、近くにある廃校を利用した共同アトスペースが避難所になっているというのを知りました。大学の仲間と、イベントに使ったことがある場所で、その中に事務所を借りている団体の人とは、顔なじみでもあります。そこに向かうことに決め、一緒にいた2人も誘いましたが、「どういうところなのかよくわからないから、いいや」と言われました。2人とはそこで別れました。アトスペースにつき、2階に上がると、AAJの事務所にはスタッフのOさんがいて、暖かく迎えてくれました。毛布と銀マットが支給されて、この日は暖かい場所で眠ることができました。

当初は、「帰宅難民の受け入れをする」といっていたのですが、協働スペースである1Fのフロアが人で溢れてしまったのを機に一転「ここは避難所ではない」となり、新しく入ってきた人は断ったりして一時は150人ぐらいたった帰宅難民も深夜動き出した電車とともに帰宅していきました。

翌朝電車が動き出したのを確認して、うちに帰りました。駅までは父が車で迎えに来てくれました。